



Alt-Focus GRAPH

十人十色のフォトストーリー

2014年9月 第3号

ミンガラーバー！ from Yangon ～桂川融己のミャンマー便り～

連載第1回 ミャンマーの今をお届けします！



合掌するちびっこ団

ミャンマーの子供たちは、カメラを向けると、みんな照れながら、合掌ポーズ。笑顔が素敵で、純粹無垢な子供達をみていると心が洗われます。

文・写真＝桂川融己

1984年2月生まれ。自然豊かな岐阜県下呂市出身。日本生命保険相互会社にて7年9ヶ月の勤務の後、退職し現在は、ミャンマーにて現地採用で勤務。

はじめまして！桂川融己です。タイトルの「ミンガラーバー」というのは、ミャンマー語の「こんにちは」です。

今、私はミャンマーのヤンゴンという都市で生活をしています。渡航直前の2013年11月に、せっかく一眼レフのカメラを持っているのだから、ミャンマーでいい写真を撮って届けたいと考え、アルトフォーカスの講座「はじめての一眼レフ」を受講。先生の「写真はなんとなくでも撮れてしまう」という一言がとても印象に残っています。この一言にハッとさせられました。それまでは、Facebookの写真に「いいね！」を押してもらって、満足している自分がいました(笑)。じっくり写真を見たくもなければ、撮ろうと意図的に撮ったこともありませんでした。

アルトフォーカスで、絞りとシャッタースピードの関係を学んでからは、写真への向き合い方が変わりました。まだまだ勉強中の身で素人の域を脱していませんが、せっかくこうしてAFグラフで機会を頂いたので、写真を通じてミャンマーの様子をお届けしたいと思えます。

興味が湧いた方はぜひ、ミャンマーにお越しください！！

ミャンマーってどんな国？

ミャンマーは、一昔前まではビルマと呼ばれていた国です。最近では新聞紙上では国の名前を見かけることも多くなり、随分と近い国になったとは思いますが、しかし、まだまだミャンマーの国のイメージと実際のミャンマーがマッチしてない人は多いことでしょう。

日本ではミャンマーと言えば、アウンサンスーチーさんや、ビルマの豎琴のイメージが根強いかもしれませんが、アウンサンスーチーさんは、ミャンマーでもやっぱり有名です。



写真は、アウンサンスーチーさんが軟禁されていた自宅。幹線通り沿いにありながらも、意識しないとそのまま通り過ぎてしまいそうになるくらい、自然に建ち並んでいます。門は閉ざされたままで、ここだけ時間が止まっているかのようです。

皆さんはミャンマーがどこにあるかご存知でしょうか？

「東南アジアのどこかだとは思いますが…」これがほとんどの方のミャンマーに対するイメージではないでしょうか？ミャンマーは、タイとインド・バングラデシュと中国に挟まれた国です。タイの西側、インドの東側、中国の南側に位置する縦長の国です。国土は約67万平方キロメートルと日本の1.8倍の広さがある大きな国です。135の民族が暮らすと言われている多民族国家でもあります。

私が暮らすヤンゴンはミャンマーの中で一番の都市ですが、まだまだ発展途上の国です。

ミャンマーの地図と基本情報：

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol93/>

なぜ、ミャンマーへ？

「30代をどこで、何をして過ごすか？」

「どこにいたら成長できるか？」

そんなことを考える中で出てきたのが「成長していく東南アジアで働く」という選択肢。

東南アジアに絞り、本・雑誌で情報収集をはじめ、気になったのはミャンマー。知り合いも住んでいないし、面白いかも！と、ほぼ「直感」での絞り込み。(笑)

私の周囲に「ミャンマーに行ったことがある」という人はいませんでした。そこで「行ってみたらネタになるんじゃないか？」という好奇心から、まずは夏休みに旅行へ行こう、とGWにインターネットで情報収集をしました。ふとFacebookで「日本人募集、ヤンゴン駐在、30歳未満、語学力問わず」の案内を発見。当時、29歳で英語ができなかった私は、すぐに申し込み。日本での面接後には「すぐにでも来て欲しい」という話を頂き、この流れに乗ってしまえと考え、2013年7月にミャンマーでの就職を決意。

「一度来た方がいい」との社長のアドバイスを受け2013年8月、人生初のミャンマー旅行。初ミャンマーは海外就職の下見だったわけです。(笑)そして12月には会社を退職し、2014年1月よりミャンマーのJ-SATコンサルティングにて、ミャンマーの求職者を日系企業様に紹介する仕事をしています。





ミャンマーの人々

街行く人々は、男性も女性もロンジーといわれる巻きスカート
の民族衣装を身にまとっています。若者のロンジー離れが
囁かれています。が、まだまだロンジーの方を多く見ます。実
際に身につけてみると、足にまとわりつく感じがなため、
涼しくて快適です。不便なのはポケットがないことくらいで
しょうか。

(上) (中) 肌の弱い小さい子供や
女性は「タナカ」といわれる日焼
け止めを顔に塗っています。
(下) 原料となるタナカの木。太
陽の紫外線から肌を守る効果
があるそうです。スツとした清涼
効果もあるため、塗ってみると
気持ちいいです。



ミャンマーのこんなことが知りたい！というご要望がありましたら、ぜひアルトフォーカス(alt-focus@alt-focus.com)へお送りください。

ステキ写真の秘密にせまる！

あの受講生に会いたい

取材・撮影を担当するのも受講生。毎号、数多くの受講生の中からお一人ずつ、ご自身の楽しい写真ライフについてお話をうかがいます。

Vol.3 岸田 恵利子さん

Profile Kishida Eriko

ご主人の一眼レフを借りて撮ってみたのがきっかけで、写真の世界に。2011年6月、アルトフォーカスの講座を受講。以来、講座やイベントに多数参加している。花を撮り歩くのが好き。写真以外にも、陶芸やテニスなど日々様々なことに意欲的に挑戦中。



『もっと一緒に遊ぼうよ』 お台場の砂浜で、無邪気に遊んでいる子どもたちを見つけ、夢中で撮った1枚。

アルトフォーカスの魅力って、どんなところにあるのでしょうか。

アルトフォーカスでは、年間を通して、講座をはじめ撮影会やバス旅や受講生作品展など、様々なイベントを組んでいます。そのどれかには参加したことがあ

っても、まだまだ知らないことがたくさんありそう。

そこで、今回の「あの受講生に会いたい」では、アルトフォーカスの講座やイベントに、ほぼ皆勤賞で参加されている岸田さんにお話を聞かせて頂きました。

偶然手にした案内状、アルトフォーカスとの出会い

「アルトフォーカスの講座を受けてほんとうによかった！」と語る岸田さん。

きっかけは、2011年。受講生作品展の案内状を手にしたこと。ちょうど岸田さんが一眼レフカメラで撮影をはじめたばかりの時でした。お友だちの誘いで受講生作品展を訪ねた岸田さんは、講座があることを知ってすぐに申し込みます。「友人から、とても人気の講座と聞いていましたが、運よく受講することができました。「最初の講座を受けてみて、『これはちゃんと勉強した方がいいな、受けてよかった』と思いました」と岸田さん。「知識をあいまいにしたり自分流でやってしまったりすると進歩しない、と感じたのです」

一眼レフのことは何もわからないまま、いきなりシャッタースピードと絞りや、ホワイトバランスや測光

など、続けて講座に参加したとのこと。意欲的です。ね。もともと、ご主人のカメラを借りての講座参加で、まったくの一眼レフ初心者の岸田さん。それでも、ていねいな講座のおかげで、知識を積み上げていきます。受講スタートからすぐに、半年後の受講生作品展にも申し込みました。

タイトルは、『観てもらおう』という視点から

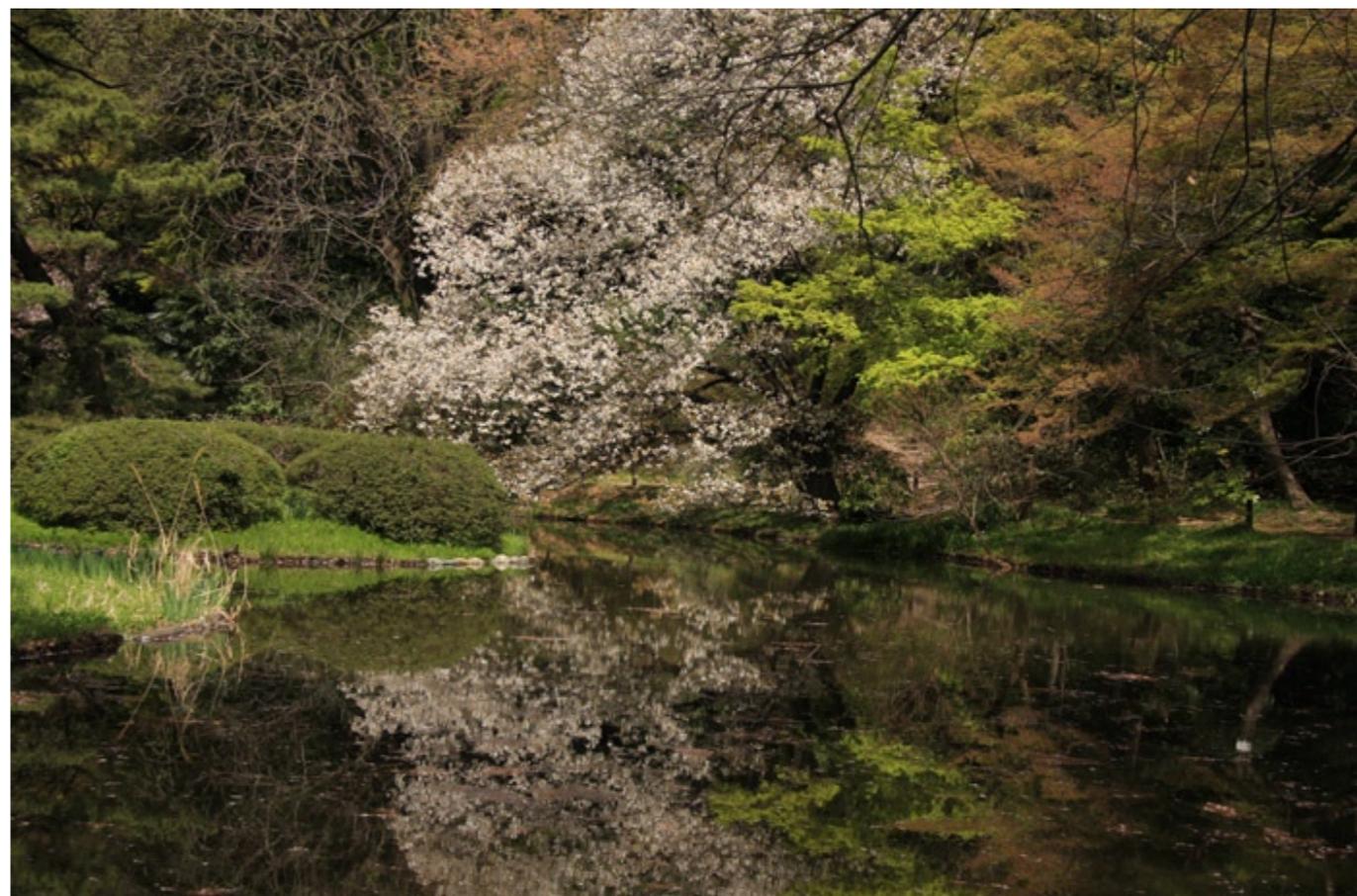
「受講生作品展は、第4-6回の、計3回参加しています。第4回は撮りはじめの1年目でしたので、撮影実習で行った横浜の夜景を3点出展しました」。その初出展の時から、岸田さんの作品のタイトルは、とても個性的。何かコツがあるのでしょうか。

「ストーリーを考えながらタイトルをつけます。人が自分の写真を観てくれて飽きないように、おもしろい

と感じてくれるように」。なるほど、タイトルも作品の一部！ですね。

今年、第6回作品展の岸田さんの作品のタイトルは、『もっと一緒に遊ぼうよ』(前ページ)と『はっとして』と『ほっとして』。

「『もっと一緒に遊ぼうよ』は、お台場で撮りました。偶然、無邪気に遊んでいる子どもたちがいて、ひと昔前っぽい感じがいいなあと思いました。『はっとして』と『ほっとして』は、両方とも夕方に映り込みを写しましたが、タイトルは『夕景』でも『映り込み』でもおもしろくない。私の写真のタイトル付けは、“観てもらおう”という視点から。こんなタイトルだと観てくれるかな、と思いながら付けています。考えていて自分も楽しいです」



左：『はっとして』 右：『ほっとして』 「タイトル付けは、観る人に「おもしろいな」と感じてもらえるように意識しています」

目的意識を持つてのぞめる撮影実習は貴重な機会

岸田さんは、撮影実習やトラベルクラブにも、多く参加しています。「バスツアーや撮影実習は、私にとって大事な機会」とおっしゃいます。「一か所に数時間を割いてじっくりと撮影に向き合える。それでも『時間が足りない』と思うほどあつという間ですが、いい体験をさせて頂いています」。できるだけ参加する一番の理由は、「撮りたい！という明確な意識があつて行くので、緊張感が持てて集中できるから」とのこと。「それに、アルトフォーカスの皆さんとでしたら、まったくの初対面ではないので、写真の話に花が咲くこともあり、参加しやすいです」

季節の花の撮影がお好きで、ご近所にある森林公園に時々行く、という岸田さんは、今年4月13日の“トラベルクラブ第13回撮影ツアー・春の花とSL列車”が特に印象的だったとのこと。「栃木県の大柿花山という里山に行きました。ボケやカタクリや吉野桜や、四季の花を何か月分も一度に見られて素敵でした。午後は真岡鐵道の蒸気機関車を撮影。ひとりで電車を撮りに行くのは勇気がいるので、貴重な機会でした」

「撮影実習やトラベルクラブに参加するときは、『今日はこんなことをやってみよう！』と目的意識をしつ

かり持てるのがいいですね。この日は、桜と菜の花とSLのコラボ写真を撮ることができて、よかったです。ときには、思ったような写真が撮れないこともあるけれど、その失敗をもとに『上達しよう！』と思えるのがまた楽しいです」と岸田さん。前向きですね。そしてとてもパワフルです。

アルトフォーカスの仲間から受ける刺激がうれしい

講座参加から3年。「撮るものへの興味が広がった」とおっしゃいます。「花、夕景、動物、映り込み、電車などの動くものなど。まわりを見る視点も、『今この瞬間をおもしろい！』と思えるようになりました。アルトフォーカスの仲間の写真に感動して、また『撮りたい！』と思うこともしばしばです。良い影響をとっても受けています」と謙虚な姿勢で取り組んでいる様子。「撮影の苦労話を聞いたり、『そういうふう撮ったんだ』と感心したり、自分とは視点が違うので楽しい。受講生作品展や懇親会で、講座でお会いしたことがない方とお話できるのも刺激になり勉強になっています」

「『新しいシチュエーションに出会いたい』と思う気持ちを大切に、難しいことを楽しんでいきたい」と意



欲的。写真ライフを満喫されていて素敵です。

「朝、『あ、今日は撮りに行ってみよう！』と思い、良い写真が撮れると『来年の作品展に出してみよう！』という気持ちになれるのがうれしい。「たくさん撮って、『次はこうしてみよう！』と思いたい。課題ができるとまたチャレンジしたいと思えて、失敗も勉強になる。アルトフォーカスの皆さんの写真を一生懸命見て、もっと刺激を受けたいです。これからもいろいろと参加したいと思います！」と熱く語ってくれました。

岸田さんへメッセージ

インタビュー中、「『もっと一緒に遊ぼうよ』の写真は、データを消してしまってどこにもないんです！」と岸田さん。驚きの事実発覚！でした(笑)。その後、USBメモリー内にあったことがわかり、無事掲載。よかったです～。たくさんの楽しいお話をありがとうございました。

取材・文=飯島利枝子 撮影=田口裕子



トラベルクラブ撮影ツアーで初めて列車の撮影に挑戦。「列車の撮影はタイミングが難しく、SLと木が重なってしまった……。ぜひリベンジしたい！」

写真家・秋野深の素顔に迫る

Vol.1 写真家への歩み

皆さん、はじめまして！アルトフォーカス受講生の太田一朗と申します。私はデジタル一眼レフの購入をきっかけにアルトフォーカスに出会い、写真について知れば知るほど教わっている先生についても知りたくなりました。今回、秋野先生にインタビュー出来る機会をいただき、漠然と考えていた疑問をぶつけてみた結果をご報告します！

写真との出会い

「私には、写真というものに興味をもったきっかけの1枚があるんです」

こんな印象的な言葉が残るインタビューとなりました。秋野先生は学生時代、卒業直前の3ヶ月間、カリフォルニアに陸上競技で留学されていたそうです！聞いていると陸上の話だけで紙面が埋まりそうなので、それはまたの機会にし、きっかけの1枚について早速うかがってみました。留学時代に友人たちと訪れたサンディエゴという街での1枚だそうです。静かに語る言葉の裏にとっても熱い思いを感じました。

秋野 友人たちとレンタカーで3泊くらいの小旅行をしたのですが、サンディエゴに着いて夕景を撮影したのがこの写真です。渡米前に買った安いコンパクトカメラで撮りました。(インタビューの場にその写真お持ちいただけました！)【右の夕景写真】

太田 こっこれは…当然フィルムですね(笑)。しかもコンパクトカメラで、きれいに撮れてるじゃないです

か！夕景の素晴らしさが伝わってきます。この写真のなかで更にきっかけとなるポイントがありますか？

秋野 見た目にもすごくきれいな夕焼けだったのですが、雲の部分など、グラデーションになっている部分に特に惹かれました。ああ、写真はこんな風に写るのかと。絵画みたいだなと思いました。つまり絵の視点で写真をみていたんです。そして絵と比較するなかで写真もちょっと面白いかもと思うにいたったんです。とにかく印象に残る1枚で、この写真は引き伸ばして額装したり、人にあげたりしました(笑)。



きっかけの1枚。いつまでも茜色に染まるサンディエゴの空

「ヒョウ柄」の衝撃

実は「写真との出会い」についてうかがう前、インタビューの冒頭にこんなエピソードがありました。

秋野 私はもともと、絵が好きでした。上手だったわけでも誰かに習ったことがあるわけでもなかったですが、

趣味だったと言えます。モノの色や形を描くことに興味があり、水彩画やデザイン画などを時間があるときに描いていて、写真はというと使い捨てカメラで記念写真を撮るくらいでした。絵は一度だけ、何を思ったか公募のコンテストに出してみたことがあります。

太田 陸上に打ち込みながらですね…。意外というか納得というか…。

秋野 「ヒョウ柄をモチーフにした平面作品」というテーマのあるコンテストでした。しかしそのコンテストで衝撃を受けるんです。受賞者には美術や芸術を学んでいる方々もいたと思います。結果発表とともに受賞作が展示されるというので作品を見に行きました。同じテーマと条件を与えられているにもかかわらず、受賞作品はアイデアや発想が自分の作品とは比較にならず、自分のあまりの稚拙さにとても衝撃を受けたことを覚えています。

太田 それは芸術の世界に身を置いているかどうかの違いではないでしょうか？

秋野 しかし普段の生活のなかに、発想やアイデアを生み出すヒントはいくらでもあるはずなんです。そのコンテストでの衝撃は、表現するということの別世界を感じた出来事でした。いかに自分はゼロから考えていなかったか、工夫もしていなかったかを思い知らされたわけです。でも、大事なことに気づかせてもらえたので、応募して受賞作を見る機会があつてほんとによかったと思いました。

都営地下鉄三田駅構内で生まれて初めての展示
「立ち止ってくれる人がいるだけで嬉しかった」

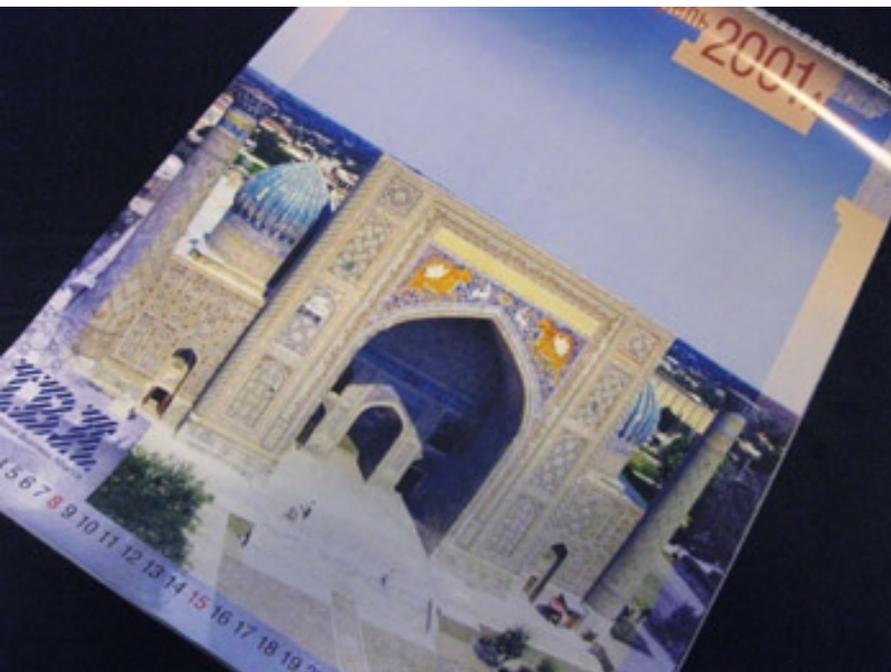


インターネットがもたらすもの

先生は卒業後、社会人になってからアイルランドやウズベキスタン、イランなどにバックパッカーとして旅をされたそうです。見知らぬ異国の言葉も通じない地で一人で過ごすことに興味があったそうで、陸上競技での留学にもその側面があったというわけですね。選んでいる地域も、シルクロードへの強い思いを感じさせます。

太田 当然、カメラを持つての旅ですよね？

秋野 そうですね。とは言えまだ記念写真です(笑)。各地を旅行して写真を撮ったり、思ったことや出来事をメモしたり、そして帰国後には友人に写真を見せたり感想を話したりしていました。そのうちホームページを作って写真や文章を載せるようにしたんです。主に知人向けのつもりだったんですが。



ベラルーシの企業が自社カレンダーの素材として採用！

太田 当時、98～99年頃はデジタルカメラでの撮影ではないですよね？

秋野 写真はスキャナーでデジタルにして載せていました。すると見知らぬ海外の人からメールが来るようになったんです。主に写真への感想などですが、私にとっては大きな出来事でした。インターネットは国内外に関係なく見てもらうことができる。また日本人であれば私の旅行記を読むこともできる。たとえば、ベラルーシ共和国(旧ソ連、ウクライナの隣)の企業からカレンダー用に写真を使いたいというメールがきたり、また旅行記を読んだ日本の方から「新婚旅行はウズベキスタンに決めました」という連絡をもらったこともあります。

太田 知人を始めとした仲間内の情報発信が、いつの間にか広く海外まで届いていたのですね。しかもカレンダー用の写真採用の問い合わせなんて相当な驚きでしょうし、ウズベキスタンへの新婚旅行にいたっては影響与えすぎですよ！

秋野 自分の興味や好奇心が意欲に変わり、文章や写真での表現活動により取り組むきっかけになったと思います。特に会社員時代の最後に訪れたイランには、「書くぞ」という強い意気込みで行きました。果たして自分の人生に影響するような多くの経験をすることができ、その後このときの旅行手記は、小さなものですがインターネットのメールマガジン関連の文学賞と出版までする機会をいただくことができました。審査員には著名な小説家・作家もいて、そこで伺った話はその後の執筆活動において大変勉強になりました。

表現活動への衝動

太田 フリーランスとしての活動を意識したのは、いつどんなきっかけですか？

秋野 写真と文章、海外や異文化体験などを通して表現活動しながら生活できたらなあという漠然とした思いはイラン旅行後に思い始めたように思います。そして実際に挑戦したい、心血を注いで取り組みたいという思いに対し、片手間で取り組んでいたのではそれこそ人生におけるリスクだと思ったのです。もちろん生活していく必要はありますので、自分の中では2年間くらい一所懸命やってみて、芽が出ず駄目ならそれはそれで仕方がないと思っていました。

太田 具体的にはどんな活動から始めたのですか？

秋野 今でもスペースはあると思いますが、最初は三田駅や日比谷駅の構内で展示をしました。何もわからず、準備は本当に大変でしたが、今思えば展示活動に一番積極的だったかも知れません(笑)。その時、通りがかりの人が1枚購入してくれました。きつとこういうことの積み重ねなんだろうなと実感したことを覚えています。また執筆活動では文学賞を受賞したこともあり、インターネット上や雑誌でのフォトエッセイの連載、海外の渡航先から現地での出来事を寄稿する、といった仕事が始まりました。

フリーランスとしての活動は、好きなことが出来る分苦労も人一倍だと思えます。厳しい評価や迷うことも多かったと思いますが、それでも続けているのは、やはり強い衝動と意欲があったからなのでしょう。振り返ると10年以上経つことになりましたが、その感想も少しかがってみました。

秋野 こうしてフリーランスで生活していることを、今でもふと不思議に思うことがあります(笑)。

会社員時代とは生活のリズムや考え方が根本的に違いますし、プライベートな時間との区別が無いと言えます。普段の生活がそのまま写真や文章のアイデアにつながるわけですが、その点を楽しみながら過ごしています。

また、当時経験したことは現在の活動において役だつことが多く、会社員を経験して良かったとも思っています。そして自分の活動の結果を形にし人に評価いただく、そして生活できているという点は写真家・執筆家を実感する時だと思えます。



でも一番印象的なのは、そう実感できるようになってから、今の自分の職業を「写真家です」と抵抗なく言えるようになったことですかね(笑)。

インタビューを終えて

大きな一歩を踏み出したあと、どんな経験をし何を感じてきたのか、ぜひ続きをうかがってみたいと思いました。私が知っているだけでもシルクロードに関連したテレビ出演や旅行会社とのコラボ、そして鳥海山の四季など、その活躍は多岐にわたります。次の機会には、苦悩や困難といった部分にフォーカスを当て、絞りに絞ってみたいと思います(笑)。あらためて今後の活動や伝えてくれるメッセージが本当に楽しみです。ありがとうございました！

取材・文=太田一朗

退社後はさらに精力的に海外へでかけ、とにかく懸命に撮り、書き続けた。
(2001年シリアのダマスカスにて)

写真教室アルトフォーカス

写真家・秋野深による個人運営の写真教室です。都内にて、主に一眼レフ、ミラーレス一眼ユーザー向けの講座、撮影会、フォトコンテスト、受講生作品展、懇親会などを開催しています。

土日開催で、テーマ別に1～3回で終了する講座が中心です。どなたも新規対象の入門講座からご参加いただいています。

ウェブサイト : <http://www.alt-focus.com>

Facebook : <https://www.facebook.com/altfocusphoto>

お問合せ : alt-focus@alt-focus.com

秋野 深(Jin Akino)

1970年生まれ。福岡県出身。会社勤務の後、写真家・執筆家に転身。アジアやアメリカの自然風景、建築物、人々の生活や文化、日本の東北地方(鳥海山麓)の自然を撮影。クラブツーリズム海外国内撮影ツアー同行講師、写真講座講師。

JATA世界旅行博2008、JATA旅博 2011(於：東京ビッグサイト)にて講演。

2008年、ウズベキスタンの文化歴史博物館にて「独立17周年記念展示 秋野深写真展」を開催。サマルカンド平和と連帯の国際博物館にて永久常設展示。

2012年、NHK BSプレミアム『極上美の饗宴』の「シリーズ平山郁夫の挑戦(1)執念のシルクロード」にゲストナビゲーターとして出演。

近著『はじめてのイラン紀行 ラーハな時に身をゆだね』をアマゾンKindleより電子出版。

ウェブサイト : <http://www.jinakino.com>

Facebook : <https://www.facebook.com/jinakino>



■フォトブック制作講座

2014年6月22日(日)【田町会場(機械工具会館)】

株式会社ナガトモさんのご協力により、「フォトブック制作講座」が開催されました。

ナガトモさんご提供の「デパ帳」はキヤノン社製最高品質のインクジェットプリンターDreamLaboを使用したフォトブック制作ソフトで、高品質高精細かつレイアウトや文字入れの自由度が高いフォトブックが自分で制作できます。

ご担当の所様をお招きして、サービスの詳細や「デパ帳」の使用方法をご説明いただきました。

ほとんどの受講生はフォトブック制作未経験。「PCが苦手な自分にうまく制作できるか・・・」「どんなテーマでまとめようか・・・」とそれぞれ不安や迷いもあるようでしたが、一番大切なことは「まずやってみること」。

今回の講座参加者は、11月末までに、スタンダードミニサイズを無料で1冊、半額でもう1冊全種類から選んで制作することができます。完成した皆さんの「自分だけのオリジナルの1冊」が楽しみです。

講座に参加され、早速1冊目を完成させた山本玲子さんにフォトブック完成までの過程をレポートしていただきました。

【株式会社ナガトモ: <http://www.depacyo.com/depacyo/>】



■フォトブック制作体験記 山本玲子

6月22日(日)講座参加

挑戦するのは、手の平サイズのブック・表紙+22ページ。サンプルをめくりながら、どんなブックにしようか妄想がふくらみます。撮ったことがないテーマで作ろう---そう決めたものの、時系列(昔と今)のテーマ、多重露光で統一するのもいいかなど、まとまらないまま制作スタートです。

6月26日(木)鎌倉へ行く

ブック用というより、旬の紫陽花を見に明月院へ。遠目にはきれいでも近づくと紫陽花は枯れかかっていた。そこで枯れた花びらや虫食いの葉を避けた構図を探したり、多重露光や前ボケでふわっとさせてみたり。

遠目にはきれいな紫陽花群



6月28日(土)編集ソフトに置いてみた

鎌倉で撮った紫陽花を編集ソフトに置いてみました。写真の容量制限がなく、サイズを気にせずアップできるのは、一眼ユーザーにはかなりのアドバンテージではないでしょうか。また、パツとしない写真がレイアウトで見違えるようになり、なんだか写真が上手な人になった気がしました。これぞブックマジック!?

6月29日(日)紫陽花再び!

前日のレイアウトですっかり気分は紫陽花。そこで高幡不動尊へ撮りに行きました。今回はブックにす

ることを意識して、レンズを2つ、ソフトフィルターも持って気合い十分。前日の仮置きで似たような構図が多いなどクセがわかったので、今回はいろんな角度から撮ること、同じ向きばかりにならないことを心がけました。こんなに考えながら集中して花を撮るのは初めてです。ブック制作がなければ途中で挫折してしまっただけでしょう・・・。

「お地藏さまを囲む紫陽花」を狙ったが、イマイチの図。



7月25日(金)フォトブック完成!→反省→決意!

その後、紫陽花を探すもあまり収穫はなく、レイアウトを完成させ注文。到着まではあつという間でした。

色の再現度はすばらしく、暗い部分も微かな陰影がちゃんと表現されているところに感動しました。製本されると3、いや4割増しくらいよく見えます。でも、気分上々でめくっていくうちに、気付いてしまいました。写真と断ち切りの間に余白が残ったままのページ・・・。写真枠の薄い点線を消し忘れていた写真が!!!ショック。次回は注文前の指さし確認、徹底します(泣)。「次こそはカンペキに仕上げるぞ!」と決意したのでした。



イベントレポート

■銀座のビル屋上ガーデンで撮影会開催！

2014年6月14日(土)【ファンケル銀座スクエア】

東京・銀座のファンケル銀座スクエア・屋上ガーデンにて紫陽花の撮影会が10名限定で開催されました。「こんな場所にこんなにお花が咲いているとは！」と参加者からは驚きの声。撮影会終了後は、8Fでファンケル研究所開発のオリジナル健康ドリンクをいただき、B1Fのオーガニックカフェ・泥武士キッチンでランチと健康的で充実した一日となりました！

【ファンケル銀座スクエア: <http://www.fancl.jp/sq/>】



講師・秋野深からのお知らせ

■伊豆の松崎町で写真ワークショップ開催

松崎町は、西伊豆の美しい海、山間の棚田、歴史を感じさせる「なまこ壁」の街並み、季節の花々、そして富士山の眺望・・・自然と歴史の魅力溢れるところです。

秋野が、町の「移住・交流による地域活性化支援事業」の一環として7月12-13日に開催された写真講座とフィールドワークの講師を務めました。主に松崎町に移住して来られた方々を対象に、地元の魅力を再発見していただき、写真は今後の移住促進イベントなどでのパンフレットに掲載予定です。

ワークショップの様子は地元の新聞で報道されました。

静岡新聞: <http://www.jinakino.com/j/image/shizuoka.jpg>

伊豆新聞: <http://izu-np.co.jp/shimoda/news/20140714iz1000000115000c.html>

■ディノスショッピングサイトで連載中

カタログ通販ディノスのオンラインショッピングサイトにて「写真家・秋野深のやさしい旅のフォトレッスン」を連載中です。旅行が大好きな方々向けに、旅の様々なシーンを想定したワンポイントレッスンです。コンパクトカメラ、一眼レフなどカメラの種類を問わず肩の力を抜いてお読みいただける内容です。

★レッスン10:夏の青空や雲を美しく撮影しよう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson10/

★レッスン09:旅先での料理の写真を印象的に！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson09/

★レッスン08:天気がよくない日にも撮影を楽しもう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson08/

★レッスン07:旅先で出会う人の自然な表情を撮ろう！

http://www.dinos.co.jp/tabinchu_shop/column/photo/lesson07/

Alt-Focus GRAPH 第3号スタッフ

飯島利枝子 (取材・執筆)

岸田さんの、写真生活を心から楽しんでいるお話は刺激的でした。私もどんどん撮影にでかけようと思います。カメラを持っているから見つけられることを、見つけに。

田口裕子 (撮影)

今回は人物撮影にチャレンジしました！人物撮影をなんとなく避けてきていた私にとって新しい挑戦です。課題はたくさんありますが、最初の一步を踏み出せたような気がします。

太田一朗 (取材・執筆・レイアウト・IT技術)

GRAPHをスマホやタブレットでご覧の方は、電子書籍の経験はありますか？より読みやすく、よりインタラクティブに。GRAPHもいつかそうなると良いな～

山本玲子 (執筆)

最近なんちゃって登山がマイブーム。そこにはいろんな花が咲いているものの高山植物の花の名前は長くて覚えにくい！「紫陽花」くらい覚えやすい名前ばかりだとよいのですが。

秋野深 (監修)

10年ほど前、タイから陸路で歩いて国境を越え、1日だけマンマーに入国したことがあります。人々の顔に塗られた白い「タナカ」を目にして驚きました。懐かしいです。

表紙写真: 「beautiful sky road」 守谷知恵子

爽やかな色彩の自然と規則的に並ぶ人工物。簡単に避けてしまう人も多い被写体を個性的なバランス感覚で融合。

Alt-Focus GRAPH 第3号
発行: 写真教室アルトフォーカス
発行日: 2014年9月5日

<http://www.alt-focus.com>
alt-focus@alt-focus.com